

はじめに

約20年前、私が英文科の学部学生だったころ、大学の授業のシラバスといえは授業科目名だけが記してあり、概要欄は無記入か「初回授業にて指示する」とだけ記載されていた。

肝心の授業はほとんどが英米小説の原書講読で、残りは教員による教科書朗読を聴いているだけのものだった。ともに大変クリエーティブな授業で、講読は苦手科目の英語が勉強できたし、朗読授業は教室に行かずに、図書館にてジャック・ラカンの精神分析理論をフランス語で自習する時間になった。さらに言えば、そうして身に付けた知識は後年思いもかけないところで役に立った。講読の予習で身に付けた辞書引きの技術は（副業の）翻訳出版作業の基礎になっていて、ラカン理論はグローバル人材としてメリーランド大学英文科に留学した時、文学理論の教員が解説できなかったので、代わりに私がクラスメートに分かりやすく説明したのであった。ただし、学部学生時代の私は「偉大な作家になるにはどうすればいいのか」ということしか考えておらず、就職活動を頑

私の授業実践

教育現場の最前線から

未来の世代に アメリカ文学ができること

森本 奈理 ● 文教大学専任講師

うした時代に英文科に戻ってきた私の奮闘は以下の通りである。

授業の目的

ここで扱うのは私の専門である「アメリカ文学」の演習授業「卒業研究Ⅰ(2)」だが、語学の授業とは違って、文学専門科目には「大きな目的」と「小さな目的」がある。「大きな目的」とは教育学でいう「隠れたカリキュラム」のことで、要は教員である私のイデオロギーのことである。私は自分を「ネオ・プラグマティスト」だと認識しているのだが、他人からは「リベラル・ヒューマニスト」だと評されてきた。いずれにせよ、私はジョン・ロールズやリチャード・ローティといったアメリカの政治哲学者を敬愛しており、彼らの思想を折衷して、「残虐な目にあう人がより少なくなる社会をめざして自由と平

等を可能な限り両立させる」ことを「知識人としての社会的責務」だと捉えている（「知識人」という存在は日本人が徹底して嫌悪するものだが、私はそれにふさわしい人間になろうと日々努力しているので、普段からあえてこの言い方を使っている）。

なぜわざわざこのようなことを書くのかというと、私が大学で授業をするのは「リベラル」な意識を学生に浸透させたいからであり、それ以外の理由は全て後付けのものにすぎないからだ。要するに、授業とは教員と学生の間、あるいは学生同士の「対話」の場であり、そうした対話を通してお互いを高め合う場だということである（むろん、教員も学生から学ぶ。私の考えでは、教員と学生の間はあくまで対等なのである）。自分とは異なる他人の意見を知ること、異質なものへの耐性を作り、他人に対して残虐な振る舞いを控えるようになる。そして、先ほど名前を挙げたローティによれば、こうしたリベラルな想像／創造力を鍛えるのに最も適した行為は文学作品を鑑賞することだという。社会がリベラルになればなるほど、人々は哲学や科学といった「理論」ではなく、文学作品鑑賞という「実践」にますます深く傾倒する。こうしたユートピアの実現は私の夢である。

次に、「小さな目的」だが、これは授業シラバスの「細かい」にある通りである。この「卒業研究Ⅰ(2)」は英文科3年生の必修科目（秋学期に開講）であり、最終学年での卒論執筆の準備をするクラスなので、学生には「自ら問いを立て、それに対する自分ならではの答えを出す」練習だけではなく、「文学作品の読解に必要な文化的背景知識」の自習もさせている。

授業の進行

最初に授業のタイムテーブルを見ていただきたい。この授業では、毎回1つの文学作品（短編小説）や映画をディスカッションの素材にするのだが、大きく分けて5つの作業を学生は求められている。表中のGWとはグループワーク、CWとはクラスワークのことである。1つのグループは5人程度であり、初回授業時にくじ引きで割り振り、全15回の授業を通じて固定している（グループワークが苦手な学生については、その学生がいるグループに教員も加わることにしており、学生が慣れてくれば、教員はそこから抜ける）。

授業は「確認テスト」から始まる。前回の授業の時に「予習の手引き」を配付

0～10分	確認テスト
10～20分	前回の復習
20～40分	意見交換（GW）
40～60分	意見交換（CW）
60～90分	小レポート作成

してあるので、ここでは、学生がそれに沿って予習をしてきたかどうかをチェックする。テストの問題は、作品の「あらすじ」クイズと英文抜粋を使用した英語クイズで構成されている。テストを実施する目的は、最初にあらずしを確認しておくとの後の作業に移りやすいことと、予習せずに教室に来る「フリーライダー」を極力排除することにある。

テストの後は「前回の復習」を行うが、これは前回授業の最後に書かせた小レポートを返却し講評を加える。その際、2名のレポートをコピーしてクラス全員に配付するが、一つは前回授業では扱えなかった重要項目を考察しているレポート、もう一つはユニークな視点を含んでいるレポートである。

授業のメインはグループでのディスカッションだが、ディスカッションのテーマは「予習の手引き」に示されているので、学生は作品を鑑賞しながら自分の答えを出して授業に來ている。テーマは毎回7つくらいで、映画『マルコムX』を扱う回を例にすると、「KKKK団とはどのようなものか」といった単純な知識確認問題や、「『コーヒーにミルクはよく混ざる』というマルコムの発言は何を意味しているのか」といった複雑な作品解釈問題が与

えられている。ちなみに、後者の解釈問題はかつて担当したゼミ学生が作成したもので、私は答えが分からなかった。私の印象では、現在の学生は文字作品よりも映像作品を読み込むことに長けており、映画を扱う授業では、「そんなに細かいところまで観ているのか」と感心させられることが多い。当然、学生は映画を卒論の素材にしたがるのだが、その場合にネックとなるのが「映画についての先行研究がほぼない」ことである。映画についての論文を書いたことのある文学研究者というのはほとんどいないようだが、むしろ、需要があるのは映画研究論文なので、この方面はもつと盛り上がってしかるべきだと思う。

グループワークの後は、そこで出た意見をクラス全員で共有することになっている。ここでは、各グループの代表者がグループで集約した意見を発表するのだが、ある種の「ブレインストーミング」を行っていることで、それをメモする私の板書はぐちゃぐちゃである。知識伝達型による授業の私の板書は整然としていることからすると、この授業でのぐちゃぐちゃな板書は学生の「意外性」を証明するものだと言えよう。もつとはつきり言えば、こういうアクティブ・ラーニングの授業で教員がきれいな板書をしている場合、その授業は実はアクティブではな

く、教員のブループリントに沿う形で行われている受身型のものだということである（「いかにして学生の意外性を確保するのか」というのはアクティブ・ラーニングを成功させるのに不可欠な問いのだが、ここでは紙幅の関係で触れないでおく）。

最後に、授業のまとめとして論題自由の小レポートを書かせており、これを提出した学生から授業は終了する。書くのが速い学生でちょうど90分、遅い学生だと105分くらいの授業時間になる。

おわりに

現在の大学では、教員の授業運営に対して「学生による評価アンケート」がある。これについて教員の間に賛否両論があるが、「学生の回答は8割がた正しい」と私は確信しているので、この結果を翌年以降の授業運営に大いに役立てている。このアンケートの総合評価として「授業を受けての満足度」という項目があるが、「卒業研究Ⅰ(2)」のスコアは4・79（5点満点）となっている。

この値は文学の授業としてはかなり高いのだが、ほぼ同じ受講生で開講した英語スキル科目「英語演習Ⅲ（翻訳入門）」の満足度が4・94であることを考慮すると、悲しいかな、教員目線でははるかに充実度が高い文学科目よ

りも、授業をやっていてそこまでの楽しみはないスキル科目のほうが学生にはうけている、ということが分かる。

むろん、こうした結果を受けて、文学科目のカリキュラムをさらに充実させねばならないのであるが、それと同時に見落としてはいけないのは、文学の授業はこうした定量的な評価になじみにくいという事実である。言い訳めいて聞こえるかもしれないが、文学のような「定性的なもの」は「定量的なもの」とは矛盾する。両者が矛盾する以上、それらを通約しようとする試みは必ず失敗するので、それぞれに固有の価値を認めて、ありのままに受け入れるしかないのだ。なぜなら、それらはいずれも人間ないし社会の異なる2つの側面を「正しく」表しているからだ。これこそがローティの教えなのだが、大学教育を取り巻く社会全体は「定量的なもの」のみを重視し、「文学なんかいらぬ」と連呼する。こうした単細胞的思考が行き着く先はニヒリズム、人間らしい生の否定に他ならない。そのことを考えるたびに、私は言いようのない徒労感を覚える。

「だって、文学はロマンなんやで。そういうロマンがいらんのやったら、あんたらいったい何のために生きてんねん？」

「地域創造学部」の挑戦

1 はじめに

2015年4月、大阪府の北部（北摂地域）に位置する追手門学院大学に、6番目の学部となる「地域創造学部」が入学定員150名でスタートした。

学校法人追手門学院は、1888年に大阪偕行社附属小学校を大阪城三の丸に設立して以来130年近くの歴史があるが、追手門学院大学は1966年に経済学部と文学部の2学部体制でスタートした。次年度が大学創立50周年であるので、わずか50年の間に学部数が3倍になったことになる。

「地域創造学部」は本学では6番目の学部であるが、6番目の学部が新たにスタートしたという単純な話ではない。というのも、設置準備の当初から、本学全体

山本 博史 ● 追手門学院大学地域創造学部副学部長

の教学改革を進めるフラッグシップ学部とすることを、理事会から使命として課せられていたからである。「地域創造学部」の設置に携わった者として、この学部が何をめざし、何に挑戦しようとしているのかを、学部設置の背景も含めて簡単に紹介したい。

2 学部設置の背景

教育機関の地域連携・地域貢献は、今ではあたり前のように語られるが、学校法人追手門学院の本格的な地域貢献は、学院創立120周年記念事業の一環として実施した「大阪城プロジェクト」（2006～2008年）であった。生物学を専門とする学院の教員・卒業生の力を結集して、大阪城公園の生物調査を行い、調査報告書『いのちの城・大阪城公園の生きもの』を

上梓した。

さらに、大阪城プロジェクトを引き継ぐ形で、2008年から2013年まで、学院発祥の地を含む上町台地の歴史・文化遺産を再発見し、大阪を古都として再発見する「上町学プロジェクト」が実施され、その過程で、「地域文化創造機構」が学院附置機関（後に大学附置機関）として設置されたのである。教育機関がもっているシーズを地域連携や地域貢献に活用するというCOC（地（知）の拠点整備事業）機能が重要視される潮流の中で、学院としても大学としても、さまざまな活動をしてきたことが、「地域創造学部」設置の背景にある。

しかし、それは表面的な背景でしかない。日本は、2010年の国勢調査における人口1億2806万人をピークに、少子高齢化・人口減少社会に突入した。このことが、「地域創造学部」設置のより重要な背景だと言っても過言ではない。

大学関係者の間では、例えば2018年問題のように、18歳人口の減少が常に話題になっていた。大学の存亡に関わるだけに、18歳人口の減少が重要な問題であることは確かに否定できない。しかし、それは学生

募集という経営の観点からの、どちらかと言えば近視眼的なものの見方ではないかと思う。

「国家百年の計は教育にあり」という言葉は、『管子』権修篇の「終身の計は人を樹うるに如くはなし」に由来するようであるが、教育機関は、学生募集という目先のことだけにとらわれず、100年後の人口減少を見据え、それに照応する教育を志向し、教育活動を実践すべきではないだろうか。

大学はフリーターやニートの養成機関ではないので、就職実績を上げることは、（学生募集にもつながるので）もちろん重要である。しかし、少子高齢化・人口減少社会に本格的に突入する今だからこそ、20年後、30年後、40年後、50年後を見据えて、大学に入学してくる18歳の若者を、職業人や生活者として地域を支え、地域の人々と共に地域を創造する人材として養成することこそが、今日の大学に課せられている使命であると考えている。「地域創造学部」設置の背景にあるのは、実はこの考えなのである。

3 地域創造学部がめざすもの

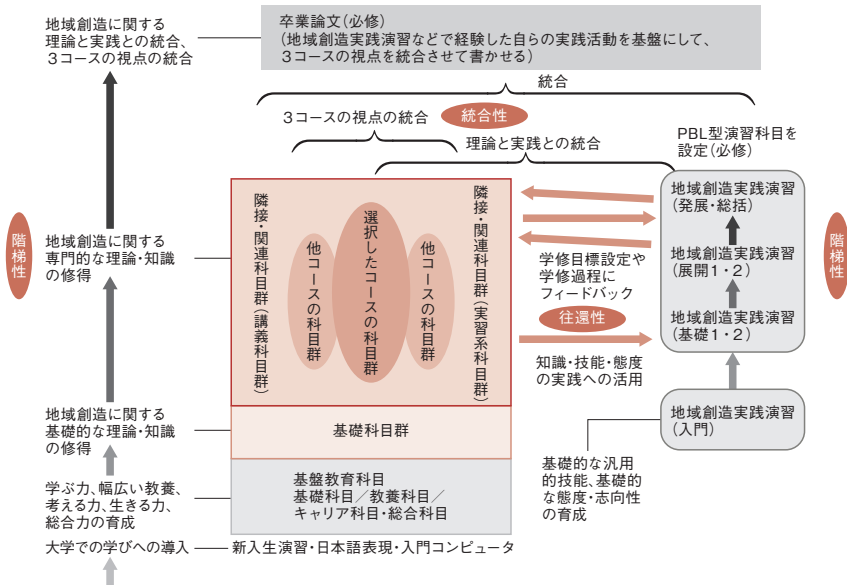
「地に足。世界にまなざし。」をキャッチコピーに、

「地域のNo.1をつくる」「地域の宝物を発見する」「地域のアンテナになる」「地域のニーズをキャッチする」をミッションとする「地域創造学部」には、3つのコース（地域経済・事業創造コース、観光・まちづくりコース、都市文化・文化創造コース）を設置し、2年次から選択させることとしている。

ただし、これらのコースは、学生の関心軸や学びの中心軸を2年次の時点で学生自身に自覚させるためのものであり、学生がどのコースを選択したとしても、他の2コースの科目を3年次から履修させる仕組みにしている。というのも、地域創造は、個別学問分野や個別的観点からだけでは成立せず、さまざまな学問分野の視点やアプローチを統合する学際的人格を持つ必要があると考えているからである。したがって、3つのコースの視点の統合性が、教育課程編成の第一の長となっている。

各コースの講義科目はいわゆる座学の形をとるが、地域創造学部の教育課程の最大の特徴は、1年次から4年次まで、「地域創造実践演習」というPBL (Project Based Learning) 型のゼミナールを必修科目として設置していることにある。

地域創造学部地域創造学科の教育課程編成の概念図



学生が、卒業後、職業人もしくは生活者として地域創造に関わるさまざまな職業・事業や活動に従事することを考えると、学生の段階から、獲得した知識・技能・態度などを実際に活用する訓練をしておく必要があるという理由から「地域創造実践演習」を設置しており、本学部の教育編成上、最も重要な科目として位置づけているのである。したがって、「地域の中で、地域に学び、地域を支え、地域を地域と共に創る」という実践性が教育課程編成の第二の特長となっている。

さらに、講義科目で身に付けた知識・技能・態度を実践に具体的に活用し、その成果を自らの学修目標設定や学修過程にフィードバックするという階梯的な往還性および理論と実践との統合性が教育課程編成の第三の特長となっているのである。

右のような教育課程の編成を構築した理由は、地域創造に関する狭量な専門的知識や技能を持った人材ではなく、幅広い教養や基礎的・汎用的能力に加え、専門的知識や技能を持ち、理論や知識と実践とを統合することができると期待する人材の育成をめざしているからである。

4 全学的な教学改革の牽引役

最初に少し触れたが、遅々として進まない本学全体の教学改革を推進するフラッグシップ学部となること
が、「地域創造学部」には課せられている。そのため、学部設置準備段階から、さまざまな取り組みを検討してきた。そこには、入学直後の宿泊型オリエンテーションの実施など、他大学で既に実施されていることも含まれているが、そのいくつかを紹介したい。

これまで本学の多くの学部では、学期始めの履修登録時に履修指導を行い、各学期終了後に修得単位数の少ない学生に対して修学指導を行うだけであった。これに対し「地域創造学部」では、これらに加えて、以下のような修学指導を行うこととしている。①コースごとに複数の履修モデルを提示 ②履修モデルをもとに、学生は4年間の学修計画を作成 ③クラス担任はポートフォリオを用いて行う年間を通じた修学指導 ④修学アドバイザーによる個別面談方式での年間を通じた修学指導。

現在のところ、必ずしもすべてが順調に行われているわけではないが、学生の生活習慣を把握し、学びを習

慣れさせるには、徹底した修学指導が必要であるとの考えから、このような取り組みを行うこととしている。

また、教養科目と専門科目の適切なバランスに配慮したカリキュラムを編成している。1991年の大学設置基準の大綱化（一般教育科目、専門教育科目などの授業科目の区分に関する規定の廃止）以降、多くの大学で教養科目が軽視される傾向があった。本学も例外ではない。そうした動きを受けて文部科学省は、事あるごとに教養科目の重要性を訴えてきた。「地域創造学部」では、卒業要件124単位の内、専門科目は72単位以上、教養科目は40単位以上修得させることにしており、教養科目と専門科目のバランスに配慮している。

しかも、教養科目についても専門科目についても、履修上の縛りをおけることによって、科目選択の自由度をかなり制限している。それは、学生に科目選択の自由を過度に認めたのでは、学部の教育目標を達成することができないとの考えに基づいている。

さらに、到達目標をはじめ使用テキストも指導方法も、個々の非常勤講師に任せっぱなしになっていた教養英語（英語8単位必修）についても、語学常勤講師をリーダーとするチームティーチングの体制を整備し

た。現在、こうしたチームティーチング体制を「新入生演習」「日本語表現」などの導入教育科目や、学部共通の一部の基礎的な科目に拡張する準備をしているところである。

また、本学部の最大の特色となる「地域創造実践演習」に関しても、担当者会議を設置し、意見交換・情報交換しながら、到達目標や指導方法について活発に議論を始めているところである。

5 「地域創造学部」成否の鍵

3コースの視点の統合、理論と実践の統合を学生に求めると書類に書くのは簡単であるが、実際はそれほど容易なことではない。教員側が自分の専門に閉じている限り、統合は学生任せになり、うまくいかないであろう。教員側こそ、自らの専門とは異なる他コースの視点に関心を示し、統合の手法を示さなければならぬ。

2012年8月の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」は、「急速に進展するグローバル化、少子高齢化による人口構造の変化、エネルギーや資源、食料等の供給問題、地域

間の格差の広がりなどの問題が急速に浮上している時代に生き、社会に貢献していくには、想定外の事態に遭遇したときに、そこに存在する問題を発見し、それを解決するための道筋を見定める能力が求められる」として、「教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換」を求めている。

教員が、自分の専門以外にも学問的関心の幅を広げ、「教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場」を創造する作業に一九となって向かっていけるかどうか、第一の成否の鍵である。

第二の成否の鍵は、地域への継続的な関わりを通して、地域から継続的なサポートが得られるかどうかである。幸いなことに、地域創造学部の設置準備段階から、近隣の自治体、市民活動団体、企業などから、地域創造学部と連携したいという申し出をたくさんいただいている。また、地域創造学部開設にあわせて、学校法人と自治体などとの間で、また大学と自治体など

との間で、包括連携協定を締結してきた。

しかし、包括連携協定の締結は連携の始まりであり、双方が具体的に動かなければすぐに形骸化してしまう。協定締結の有無は別として、地域との関わりに継続性をもたせられるかどうかは鍵である。継続性を担保すると同時に、学生の能動的学修の機会を増やすために、現在、「地域創造実践演習」に加えて、学部独自のインターンシップ科目「地域創造インターンシップ（仮称）」の開設を検討しているところである。

先日開催されたオープンキャンパスで、第一期生の学生（オープンキャンパス・スタッフ学生）が、新潟県から参加していた女子高校生に対応しているのを見ていたある教員が、心強い感想をメールで送ってきた。そこには次のように書かれていた。「いい学部、いい教育環境を作りたい、いや、作るぞと、意を新たにしました」と。

「地域創造学部」が本当の意味で成功するかどうかは、学部構成員全員が、こうした熱い思いを抱くかどうかにかかっている。「地域創造学部」の成功に向けて、学部構成員全員で挑戦したいと思っている。

わが 大学史の 一場面

日本の近代化と
大学の歴史

創立50周年を迎える「白百合の精神」 ——カトリック大学としての仙台白百合女子大学

1 はじめに

「仙台白百合女子大学」は来る2016年、前身の短期大学創設の1966年から50周年、4年制大学設立から20周年を記念する。経営母体であるカトリック修道会「シヤルトル聖パウロ修道女会」の日本での最初の活動は、137年前の北海道・函館から始まる。現在は函館白百合学園をはじめ、九州の八代白百合学園（熊本県）まで、全国の「白百合学園」を姉妹校とする。

仙台白百合女子大学の母体である仙台白百合学園は創立122年の伝統を有し、「仙台白百合」の名は地元で親しまれている。日本の近代化の時代と学園の歩みはほぼ並行し、仙台白百合短期大学の創立は高度経済成長期後半、仙台白百合女子大学の設立は、さまざまな災害・

事件のあった世紀末を思わせる時期でもあった。そもそも大学史は、通常は創立者の物語から始まる。しかし、創立から現在に至る過去を辿るだけでは、大学の歴史を記述する（語る）ことにならないと思うので、敢えて現在から溯及して述べること

宮崎 正美 ● 仙台白百合女子大学人間学部教授



正門から新1号館と体育館（右奥）を望む

をお許しただきたい。いずれにせよ、大学史の一場面を切り出すのはいくつかの理由で難しく、むしろ現在にその照準を当てることにしたい。過去の歴史は現在に集約されると言えば、かなり抽象的に聞こえるかもしれないが。

2 仙台白百合女子大学の現状

以下は、学部学科構成、附属機関、関連施設、および最近の本学に関する概要である。

(1) 学科構成

現在の仙台白百合女子大学は、「人間学部」の1学部を、人間発達学科、心理福祉学科、健康栄養学科、グローバル・スタディーズ学科の4学科によって構成している(2013年以降)。心理福祉学科、グローバル・スタディーズ学科は、それまでの総合福祉学科、国際教養学科から学科名称変更とカリキュラムの改編により改組。

(2) おもな附属機関

おもな附属機関には、仙台白百合女子大学附属図書館 FONS SAPIENTIAE、カトリック研究所、人間発達研究センター、学修支援センター、国際交流センターがある。

① 学修支援センター

2014年設置。臨床心理士のスタッフによる学生相談室を含め、学生の支援を行っている。「修学相談・適応支援」「リメディアル教育支援」「スタディ・スキルの習得支援」をはじめ、学生が参加できる多様でユニークな企画を実施している。また、ピア・サポーター養成にも力を入れている。

② 国際交流センター

2007年設置。本学学生の留学サポート、海外研修旅行、国際交流などに関する諸活動を担当する。

*留学協定提携校(7校)・・・ベネディクティン大学、カリフォルニア大学リバーサイド校、ヴィクトリア大学、ニューサウスウェールズ大学、セントポール大学マニラ校、バレンシア大学、エディンバラ大学

*交換留学提携校(7校)・・・釜慶大学校、韓国カトリック大学校、誠信女子大学校、山西大学、山西大学商務学院、靜宜大学、開南大学

③ 人間発達研究センター

2005年設置。19名の研究員、13名の客員研究員が所属。紀要『人間の発達』を発行している。

④ カトリック研究所

1994年設置。現在、6名の所員、3名の客員研究員が所属。蔵書数約8000冊。

⑤ 附属図書館 FONS SAPIENTIAE

蔵書数・約10万冊、座席数184席。附属図書館正面に掲げられたラテン語「FONS SAPIENTIAE(知の泉)」は、今年1月に逝去された本学名誉教授・岩田靖夫氏(哲学、文化功労者)の命名。カトリック大学連盟図書館協議会に加入する13の大学附属図書館の一つであり、「カトリック大学横断検索サービス」ができる。

(3) 関連施設—高齢者福祉複合施設 カリタスの丘

大学の敷地内に2004年に開設。社会福祉法人・仙台白百合会により地域社会の高齢者福祉に貢献するのみならず、大学の専門職養成教育のための実習・教育および研究の場として、大きな役割



カリタスの丘 (一部)

を担う。施設は、特別養護老人ホーム「百合ヶ丘苑」、ケアハウス「それいゆ」、「百合ヶ丘デイサービスセンター」、「百合介護支援センター」、特別養護老人ホーム「梅が丘」、グループホーム「さちの家」からなる。

なお、「百合ヶ丘」という地名は大学近辺に存在しないが、大学名に由来して、隣接する地域のマンション名などに複数使用されている。

(4) 大学生協およびステラ・マリス

みやぎインターカ

レッジコープ仙台白百合女子大店は「アマカ・ピア」の愛称で2006年にオープンした。大学オリジナルグッズも販売している。学生食堂と学生ラウンジを兼ねた複合的福利厚生施設「Stella Maria」と共に、学生生活になくってはならない存在である。

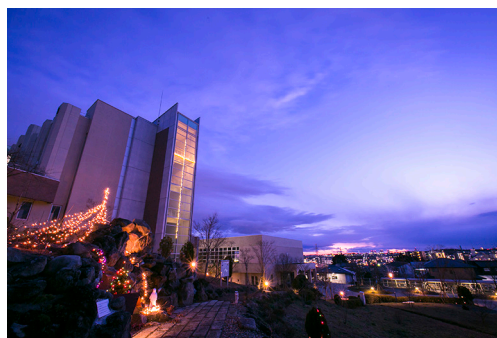


ステラ・マリス

(5) 大学の現況

仙台白百合女子大学の現状（概略）を以下に述べる。本学は学生数約1000名程度の小規模私立大学であるが、学生の満足度は、概ね良好である。学生の出身は北海道から九州に及ぶが、大半が東北出身である。

現在の本学学生の多くは、所属学科をアイデンティティとして強く意識しており、それは各々がめざす資格取得との関連から必然ともいえる。他方、「人間学部」に帰属するという意識が希薄である。それは、建学の精神の理解度の低さと連動しているのかもしれない。



クリスマス・イルミネーション。仙台市内を一望する

東日本大震災では、1人のかげがえのない命が奪われた。震災後、実に多くの学生および教職員がボランティア活動を行ったが、学生のボランティア活動は震災前から盛んであり、サークル活動やゼミの形式で現在も行われて

いる。

仙台白百合女子大学の学生の特質はさまざまところで発揮され、新入生歓迎行事、オープンキャンパスなどのときに、学生スタッフの対応や笑顔に高い評価を得ている。それは、前身の「白短」と呼ばれた仙台白百合短期大学時代から継承されてきたものといえよう。

3 仙台白百合女子大学の誕生

仙台白百合女子大学設立の1996年当時は、人間発達学科と人間生活学科の2学科構成で、後者は生活福祉専攻および健康栄養専攻の2専攻だったが、それぞれ後に2学科に昇格した。仙台白百合短期大学英语科（1987年設置）は、2003年に閉学するまで併存していたが、2002年以降は仙台白百合女子大学人間学部国際教養学科に昇華し、現在に至る4学科の体制が整う。

大学誕生の母体「白短」時代は、「白百合」お嬢様学校、というブランドイメージから、卒業後はおもに2つの道が考えられていたように筆者は考えている。一つは文字通り「良妻賢母」となる道で、他方はそうした教育を受けた女性として、キャビン・アテンダントなど、おもにホスピタリティと教養を兼ね備えたキャリアをめざ

す道である。

4 シャルトル聖パウロ修道女会(白百合)の精神

筆者が担当する必修科目(人間論)では、最初に設立母体創立の歴史を教える。320年前のヨーロッパ近代化の過渡期に、フランスの社会の一隅で苦しみ、支援を必要とする子どもたちをただ見ていることができなかった女性たちが、修道会の基礎となったこと。および、日本が近代化に向かう140年前の函館でも、修道会のその同じ使命を自分の使命として生きた女性たちが、百合の基礎を築いたことなどである。

「では白百合の教育を受けている君たちは『貧しい子どもたち』だろうか」と問うと、ほぼ全員がはつとする。

高校が白百合、あるいは中には「幼・小・中・高と百合合でした」という学生も珍しくなく、彼女らは何度も聞いた話のはずだが、こうした問い掛けに初めて直面するのである。「皆がこうして受けている白百合の教育は、白百合の精神の継承者を育成すること、以て人間的な社会の変革をめざすことを、目的として含んでいたはずだ」と言う、学生たちはリアクションパーパーに「白百合

の教育の理念がようやく分かった」「この大学に学んでいることに誇りがもてた」などと書いて提出する。

白百合学園の式井久美子理事長は、学生たちが、日本全国のみならず全世界のシャルトル聖パウロ修道女会の家族の一員であることを「Paulinian(パウロの娘)」という表現を使いつつ、白百合の精神の継承者としての自覚を促している。劇的回心をする以前には教会の迫害者だったパウロが「弱い人に対しては、弱い人のように……)すべての人に対してすべてのものになりました」(1コリント9章22節)と言ったその精神にならうのである。

いうまでもなく、そのパウロの精神は、「汝の敵を愛せ」(マタイ福音書5章44節)と厳命して、自分と異なる者と愛によって一つになる、イエス・キリストの平和の福音に基づいている。

このようにして、仙台白百合女子大学は、他のカトリック大学、キリスト教大学と共に、キリストの福音に基づく人間の理解と支援を建学の精神とし、この世界を人間らしい平和な世界へと変容させる女性の育成をめざすのである。この世界を支配する経済的価値が中心の価値観ではなく、平和の価値を中心とする普遍的な価値観への転換は、カトリック大学としては非現実的とは考えない

のである。

5 結び

歴史を語ることに責任が伴う。その責任は、過去の歴史に対する責任であると同時に、未来に対する責任でもある。大学史の一場面として現在をみることによって、その責任を自覚することが必要であろうと考えた。目を転じれば、同じこの現在、日本の政治は「平和」のためといながら、武力行使を可能にして、平和とは正反対の状況を招こうとしている。そうした状況が、日本全体、特に大学生や高校生に、自分自身として考えて行動することを促している。真理の探究の最高の学府たる大学が、率先して社会全体の良識を喚起できないとしたら、それこそ社会的役割を果たしていないのではないか。

高等教育を受けたはずの為政者の方々が、現に大学教育を受けている、あるいはこれから受けようとしている若者たちに糾弾されていることを、しっかりと銘記しておくべきであろう。戦後日本の大学教育がどの程度のものであったのか。今、まさに大学の「現在」が問われている。

再び仙台白百合女子大学の現在に戻ろう。客観的にみ

て、他大学のような多くの輝かしい歴史を有する学府とは思わない。既述のように小規模の大学であるが、「百合の精神」に裏打ちされたさまざまな可能性をもっている大学だと考えている。

もとより、日本のカトリック大学は、文部科学省認可の大学であると同時に、カトリック大学としての要件を満たすものでなければならぬ。大学基準協会の大学評価を過小評価するつもりはない。しかし仙台白百合女子大学が、カトリック教会をとおして世界中の多くの大学と深いつながりを有していることは、カトリック大学である限りにおいて真実である。同時に、仙台白百合女子大学の独自性は、カトリック大学であることの基礎の上に、白百合の精神を使命とする点にある。

カトリック大学としての仙台白百合女子大学が、その可能性をどのように展開していくのか、現在にかかっていることはいうまでもない。

